

月の岬

作・松田正隆

■登場人物

平岡佐和子

平岡信夫

平岡直子

大浦幸一

大浦和美

清川悟

清川裕子

清川有里

丸尾(生徒)

沢柳(生徒)

七瀬(生徒)

杉本(駐在)

江頭峯子

月の夜ばい
潮の満ちて
岬の切れて
島になると

1

波の音、かすかに……。

夏の朝。平岡家の居間。まだ、誰もいない。

庭に朝の光が射し始め、せみしぐれ蝉時雨が降りそそぐ。

やがて、台所の方から、平岡佐和子が現れる。

仏壇へのお供物をのせた盆を持ち、足早に隣の部屋へ消える。

チーンとその部屋からりん鈴が鳴る。

佐和子の声 信夫。起きなさい。早よう！

佐和子、現れ、再び台所へ。……やがて、庭に大浦和美が現れる。

黒っぽい礼装である。和美は近所の大浦家に嫁いだ佐和子の妹。

和美 おはよう。

佐和子（廊下に顔を出し）ああ、おはよう。

和美 何ね。まだ、そげん格好しとると？・

佐和子 うん……。 (ト、また台所へ)

和美 何はしよつとね。 (ト、廊下へ縁側に腰掛ける) 兄さん
は？

佐和子の声 寝とる。いっちゃん起きんとよ。

和美 もう、何時て思うとると？

佐和子の声 昨日は、幸一さんも、一緒やったとやろ。

和美 そうよ。夜中の一時過ぎやったかな……。漬け物石にぶ
つかって……。バチのあたったたい。

佐和子の声 もう、起きとらすと、幸一さん。

和美 あたりまえやろ。いくら何でもしたくはできとるよ。

佐和子の声 あんた、ちよつと起こしてよ！

和美 嫌ばい。……。もう、一緒に行こうて思うて来たとに。

佐和子の声 ちよつと、待つとかんね。

佐和子、朝食をのせた盆を持って現れ、ちゃぶ台に置く。

和美 何、今から御飯ね。

佐和子 うん。

和美 そげん暇はなかとよ。

佐和子 ばってん食べんばおなかのへるたい。シーンってしと
るときに、グーグー鳴ったらどげんするとね。

和美 そんなら、もつと早よ食べとかんね。

佐和子 私もちよつと起きるとの遅かったけん。 (ト、台所へ)

和美 もう、何はしよつとね。

佐和子の声 しょんなかやろ。

和美 (隣室へ向けて怒鳴る) 兄さん！ 早よ、起きんね！

御飯の用意のできとるよ！ いつまで、姉さんに心配かける

気ね！

平岡信夫が隣部屋から、ぼんやり現れる。パジャマ姿のまま。

和美 あ。起きて来た。……おはよう。

信夫 ……おはよう。

和美 ……何ね、二日酔？

信夫 ……幸一君は？

和美 何か、頭の痛かては言いよったばってん。

信夫 フーン。

和美 ちよっと早よせんば間に合わんよ。

信夫 何が。

和美 何がって、フェリーの時間たい。何ば言いよっとね。今

日は、何の日て思うとるとね！

信夫 ああ、わかっとる、大きな声ば出すな。……いただきます

す。

ト、信夫、気持ち悪そうに食事を始める。

和美 もう、のん気かとやけん。

佐和子も現れ、自分の食事をちゃぶ台に並べ、

佐和子 いただきます。(ト、食べる) ……タカナ、食べてよ。

信夫 え？ ……うん。

和美 もう、遅れても知らんけんね。

佐和子 あ、そうやった！ ……和美。

和美 え？

佐和子 帯ジメ持っとるよね。

和美 帯ジメ……。ええと……。

佐和子 それ以外に持っとるよね。

和美 ……うん。

佐和子 ちょっと、持って来てやらん？

和美 よかけど。姉さん持っとらんと？

佐和子 持っとるとけど、喪服にするとしかなかとさ。

和美 もう、そいでよかたい。ねえ。

信夫 うん。よか、よか、誰も見とらん。

佐和子 いや、そうも、いかんたい。あ、ホラ、落とした。

信夫がタカナをつかみそこね、落としたのを、拾い、台ふきでふく。

和美 あ、そう、そう、……姉さん、知った？

佐和子 何ば。

和美 ……清川の、悟さん。

佐和子 え？

和美 知った？

佐和子 そいけん何ばね。

和美 帰って来とらすとって。

佐和子 そうね。

和美 兄さんは。

信夫 知らん。

和美 ……そいがね、何か、逃げて来とらすとって。

佐和子 何でまた。

和美 東京で会社ばしよらしたやろ、ゴルフの会員券か何か売
りよる。

佐和子 うん。

和美 そいがうまくいかんごとなって、銀行に借金ば返しきら
んで逃げて来とらすとって。

佐和子 へえ。

和美 奥さんも子供さんもおらすとにねえ。

佐和子 あんたも、ようそげんこと知つとるねえ。

和美 ホラ、川添のおばちゃんの言いよらしたと。あんおばち
ゃんなら何でも知つとらすけんねえ。兄さんのことも。どこ
でいつ見合いばしたかも知つとつたらしかよ。直子さんが長
崎の短大ば出とらすことも知つとつたとって……幸一さんの
言いよつた。

ああ、それでね、悟さんのことも。身代限りになつとるはず
の清川の破れ家で、悟が一人、台所に立って米ばとぎよつた
って、まるで、どっからかのぞいてきたとて言うとって。本
当、あのおばちゃんならよう知つとるよねえ……。

ばってん、清川は何かある家じゃあるよね。ホラホラ、この
あいだも、三番目の娘の熊本に嫁いどるやろ。

佐和子 和美。

和美 何。

佐和子 もう、そげん話はよかけん、早よ取って来てよ。

和美 ああ、そうやった。……いると、やっぱり。

佐和子 いるけん、こうして頼みよるとやろ。

和美 ばってんあつたかな。

佐和子 ……あんた。幸一さんの弟の結婚式のとて、母さんの
使いよつたとて、一本持っていったやろ。

和美 ああ、そうやったかな。……どこやったかな……。うん
……あることはあるばってん……。

佐和子 早よ、持って来んね。

和美 はいはい……。そっちこそ、早よ用意ばしてくださいよ。

ト、和美、去る。……二人の食事は続く。

佐和子 ……返しとうなかとよ。

信夫 え？

佐和子 和美、帯ジメ……。

信夫 そうやろか……。

佐和子 私が気に入るとるって知っとるもんけん。

信夫 フーン。

佐和子 母さんが死んだときは、まだ子供やったけん、わからんやったけどさ。ホラ、着物とか、まだ、興味のなかやろ、二人とも。ばってん、この頃は、何で姉さんばかりが母さんのもんば持つとるとやろかって言うことなってる。何でて、あたりまえたいねえ。私がおん家におるとやけん……。何か、カン違いしとるとよ……。ま、昔から欲ばりやったけんね、甘やかされて……。

信夫 うん……。

間。

信夫 ……本当に、知らんやったと？

佐和子 え？ ……何が？

信夫 ……。(ト、食べる。)

佐和子 ……何ば？

信夫 ……。(ト、食べる。)

佐和子 ……何で？ ……何ばね。

信夫 こん前、話よるとこば見たけん……。

佐和子 誰と……。

信夫 ……悟さんと……。

佐和子 ……どこで……。

信夫 そこ……玄関のどこ……。

佐和子 ……じゃ、何ね、あんたも知ったとね。

信夫 ……。

信夫、みそ汁にむせてしまう。少しこぼれて、

佐和子 ……何ばしよつとね。ちゃんと食べんね。

ト、佐和子、台ふきでふく。二人は、しばらく無言で食事する。

信夫 ……何しに来たとね。

佐和子 え？ 何が。

信夫 あん、男たい……。

佐和子 知らんよ。

信夫 知らんよつて会うたとやろが。

佐和子 何か、挨拶ばしに来らしたとやろ。帰つて来たつて

……。

信夫 そいで。

佐和子 そいでつて、そいだけたい。何ば言いよつとね。

信夫 かえって来たって、そいだけ言いに来たとね。
佐和子 そうよ。

信夫 何でやろか、姉さんだけに。

佐和子 知らんよ。

信夫 フーン。

佐和子 何ね……。

信夫 うんにゃ、別に……。

問。

佐和子 ね、私、化粧、濃ゆうなか？

信夫 うん。こゆなか。

佐和子 薄うなか？

信夫 うん。うすなか。

佐和子 どうね。

信夫 どうって、何か。

佐和子 どげん感じ？ よかかな、これで。

信夫 うん、よかよか……。ごちそうさま。(ト、立ちあがる)

佐和子 信夫。

信夫、自分の食器をまとめ、台所へ。佐和子も食べ終え、食器類をかたづける。そこに和美の夫、大浦幸一が現れる。やはり、礼装である。庭から声をかけて、

幸一 あ、おはようございます。

佐和子 おはようございます。

幸一 義姉^{ねえ}さん、これ。(ト、帯ジメを渡す)

佐和子 あら、どうもすいません。(ト、受けとる)

幸一 親父おやじにつかまってしもうて。(ト、和美的こと)

佐和子 そうですか。どうかあらすとじゃなかですか。

幸一 いいえ、どうもなかとです。私たちが出て行くとなると

何か、わがままばかり言い出すとですよ。

佐和子 具合の方は、もうどうもあらっさんですか？

幸一 まあ、病気の方は何とか。ばってん、こっちの方(ト、頭を示す)は、もう治らんでしょうね。信夫さんの結婚するって言うても、何かポカーンってして、ようわかったらんごたるとです。

佐和子 そうですか。信夫も子供ン頃は、めんどろば見てもろうてお世話ばかりかけとったとですよ。「大浦のおじちゃんところ行ってくる」って言うて、学校からかえって来たら、いちばんにかけて行きよったとに……。最近ほ外にも出らっさんとじゃなかですか。

幸一 ええ。

佐和子 そうでしょう。お見かけせんですもん。

幸一 ええ。家にばかりおるごとなって……。時間、大丈夫とですか？

佐和子 ああ、すんまつせん。(ト、立ち、台所へ)

信夫！ 幸一さん！

幸一、縁側にすわる。……しばらくして、信夫、現れる。首にかけたタオルで、顔をふきながら。

信夫 おう。

幸一 おはようございます。

信夫 おはよう。具合、どうもなか？

幸一 ええ、まあ。

信夫 あ、そう。

幸一 あれじゃ、飲み過ぎですよ。

信夫 うん。

幸一 大丈夫ですか、今日も飲まんばとに。

信夫 うん、まあ、何とかなるやろ。

幸一 もう、行きますよ。

信夫 え、まだ、大丈夫やろ。

幸一 いや、もう、出ますよ、フェリー。

信夫 あ、そう。

信夫、壁にかかったモーニングに着がえ始める。

幸一 ……やっぱ、考えた方がよかですよ。

信夫 何ば。

幸一 昨日、あれから家にかえって、少し考えたとですけどね。

信夫 だけん何ばね。

幸一 住むとこですよ。

信夫 誰の。

幸一 信夫さんと、直子さんの。

信夫 そげんこと、君が考えることじゃなかやろ。

幸一 いや、いろいろと考えるとですよ、私だって。

信夫 よかよ。別に幸一君が考えんでも。

幸一 ばってん、私が考えんで、いったい誰が考えるとですか。

信夫さん、全然考えとらんごたるし。そうでしょう、まるで、

他人ごとじゃなかですか。

信夫 ばってん、考えてもいっしょしたい。むこうも、そいでよかていうて承知しとるとやけん。

幸一 同居は何かと大変かとですよ。

信夫 それは、君んとこの話やろ。別に、うちはそげんことはなかけん……。

幸一 ……。最初は誰でもそげん言うとですよ……。ばってん、そのうち、辛くて淋しい思いばせんばごとなって、不幸のどん底に落ちるとは目に見えとるとですよけん。

信夫 やめてくれよ、縁起でもななことば言うとは……。

幸一 直子さんのことだけじゃなかつですよ。佐和子義姉さんのこともあるじゃなかつですか。

信夫 姉さん？

幸一 ええ。

信夫 ……何で。

幸一 だつて……。だつて、新婚夫婦と一緒に、独身の女性が寝泊まりするとですよ。せいも一つ屋根の下で……。

信夫 うん。

幸一 ……ねえ。

信夫 ねえつて言われてもな。

幸一 お互いにたまらんですよ。

信夫 わざわざ、そげんことば、昨日の夜、考えよつたとね。どうかしとるつちやなかつ。

幸一 一番、大事なことじゃなかつですか……。

信夫 ま、そうやろうけど……。

幸一 上ノ里に教員住宅のあるでしょう。そこに、信夫さんたちに移ればよかつですよ。

信夫 よかよ、そげんことまでせんで……。

幸一 ……いや、本当……最初はよかとですよ……最初は……。

信夫 ……幸一君が移りたかとじゃなかと？

幸一 え？ ……いや……うちはそうもいかんとですよ。一応、めんどろば見んばですけん。親父の……。

信夫 ま、でも、そのうち、嫌でも、こん島ば出んばときにくるかもしれんとやけん……。

幸一 え？ 何ですか。

信夫 おいも、五年もおるけんね、分校に。

幸一 ばってん、転勤願いと出しとらんとでしよう。

信夫 うん、そうばってん……。教頭には、もしも辞令の出たらどこでん行きますよては言うてあるとよ。

幸一 そうですか……。ま、しょんなかですもんね、こいばつかりは……。

信夫 うん……。よかとば着とるね。

幸一 え？

信夫 背広……。そげんと持つとった？

幸一 買うて来たとですよ。こん日のために、長崎のデパートで。たかかったとですよ。（ト、胸を張る）

信夫 ばってん、何か、おかしかね。

幸一 ええ!? 何がですか！

信夫 ちょっと大きかとかな……。

幸一 ええ？（ト、自分の服を不安げに見る）

セカセカとエプロンをたたみながら現れる佐和子

佐和子 ちょっとちょっと、間に合わんばい。

ト、隣部屋に消えて、着替え始める。

佐和子の声 もう、着替えたと？

信夫 うん。

佐和子の声 ああ、もう、これ、どがんするとやったかな！

(ト、着付けがうまくいかない)

信夫、幸一、隣部屋へ視線がいく。

間。

ト、佐和子、顔を出す。

佐和子 ……信夫。

信夫 うん？

佐和子 タオルば持ってきて。

信夫 うん。(ト、洗面所へ)

佐和子 すいません(ト、幸一へ笑いかける)

幸一 あ、いえ。

佐和子、顔を引っ込めるがまた出して、

佐和子 ……うん？(ト、げんなりな表情)

幸一 え？

佐和子 ……ちょっと、大きかと思いませんか？

幸一 え？

佐和子 そんな服……。

幸一 はあ……。

佐和子 あ、でも……気にせんでください……。

ト、顔を引つ込める佐和子。「気にするな」と言われても気になる幸一、袖丈やズボンの裾を見る。そこに和美が、荷物を持って現れる。

和美 何ばしよつと。

幸一 へ？

和美 何ばしよつとですか。

幸一 なあ、こん服、何か、大きゆうなかや。

和美 うんにゃ、大きゆうなかです。ちようどよか、立派なもんです。はい、これ持って。(ト、荷物を差し出す)

幸一、受け取る。が、やはり少し気になって……。

和美 じゃ、姉さん、私たち、先に行つとくけん。

佐和子の声 はい、はい……。行つとつて……。

和美 早よ、来んばよ……。遅れたら、私たちまで恥かくとやけんね。

佐和子の声 はい、はい。

和美 じゃ、行きましよう。

幸一 うん。

二人、去る。信夫、タオルを持って現れる。隣部屋の前で立ち止まり、

信夫
タオル。

佐和子の声　ありがとう。

隣部屋の佐和子に渡す。

佐和子の声　……もう、用恵はできとると。

信夫の声　うん。……早よせんね。

佐和子の声　あんたが、早よ起きんけんたい。

信夫、外を見て、立っている。

佐和子の声　……直子さんも大変かやろね。

信夫　何が。

佐和子の声　こげん暑かときに……。

信夫　うん……。ばってん、式場で着がえるとやろ。

佐和子の声　あ、そうね……。冷房のきいとるけんねえ。……

こっちにも式場の一つぐらいあつたらよかとに……。

信夫　こげん人のおらんとおころにつくつても、しよんなかたい。

佐和子の声　あっちの人はよかよねえ……。何でもあるけんねえ……。

間。

信夫　姉さん。

佐和子の声　何ね。

信夫　大学の時の友だちで、渡辺っておったやろ。

佐和子の声　え？

信夫　一回、うちに来たことのあるとよ。

佐和子の声 ああ……、渡辺君……。うん。

信夫 結婚式、よんだとばってん、よかったとやろかて、思うて……。

佐和子の声 ……何で……。

信夫 こん前、子供の死んだやろ……。交通事故で……。

佐和子の声 ああ、そうやったね、あんた、お葬式に行つたもんね。

信夫 何か、気の毒つかごたつてさ……。ま、よばんともおかしかとやろけど。こげんときに人の祝いごとば見ても、気のめいるばつかりやろて思うて……。奥さんも一緒によんどつたとばってん……。来られんごたるとさ……。ここ最近……。奥さん……。何か、ちよつと、病気がちにならしたとやろ……。……。ま、無理もなかよね。……。まだ、幼稚園にあがつてすぐやつたらしかけんねえ……。

佐和子の声 ……そうね……。ばってん、もう、しよんなかたい。よんでしもうとるとやけん……。

信夫 うん……。

間。佐和子は着がえがすんだらしい。

佐和子の声 ……信夫。

信夫 うん？

佐和子の声 お父さんとお母さん……。

信夫 うん。(ト、隣部屋へ)

やがて、鈴が鳴る。

佐和子の声 ……りっぱかね、モーニング。……よう似おうと
るよ。

信夫の声 そうかな……。

佐和子の声 うん……よう似おうとる。

間。

佐和子の声 じゃ、行きましようか。

二人、現れる。それぞれ、荷物を持っている。

佐和子 忘れもんなかよね。(ト、縁側のガラス戸を閉める)

信夫 姉さん。

佐和子 何ね。(ト、カギをしめる)

信夫 挨拶考えたと。今日、最後に言わんばとやろ。披露宴の。

佐和子 ああ。

信夫 何て言うと。

佐和子 何でんよかじゃなかね。あんたも何か言わんばとじゃ

なかと？

信夫 うん。

佐和子 何て言うかね。

信夫 何でんよかたい。

佐和子 何ね、それ。

二人去る。誰もいなくなる。再びわき上がる蝉時雨。しばらくして、汽笛が鳴る。

庭に男が現れる。清川悟。中をのぞいて、ガラス戸をたたく。

……さらに、開けようとするが開かない。また、汽笛が鳴る。今度は遠くで……。

悟、あきらめて港を見つめる。

船はゆく。

暗転。

2

数日後。午後。居間には誰もいない。ガラス戸も閉まっている。

清川悟が現れる。中をのぞいてガラス戸をたたく。戸に手をかけると片方だけが開いてしまう。せきばらいをひとつ。ふたつ……。

反応がないので仕方なく縁側に腰かける。

夏の日射し。一びき、どこかで蝉が鳴いている。

佐和子を買物カゴを持ち、現れる。いきなりの人の気配に驚いて、立ち止まる。

悟 ……こんにちは。

佐和子 ……こんにちは。(ト、仕方なく答える)

佐和子、庭を玄関の方へ行き、再び、廊下に現れる。

悟 買物？

佐和子 ええ。

ト、台所へ消える。

悟 そっか……。今日、帰って来らずと……。

佐和子、手拭いで、汗をふきつつ現れ、

佐和子 何ですか。

悟 え？ 何て、別になかけど。

佐和子 なかなら何しに来たのですか。かえってください。

ト、佐和子、閉まっている方のガラス戸をガタガタと音をたてて開ける。

悟 今日は、何のごちそうのがあると。

佐和子 何でんよかじゃなかですか。(ト、台所へ)

悟 ……直子さんは、長崎の人やろ。……刺身やら食べらすとやろか。ま、日本人やったら誰でん食べるか……。長崎のものがチャンポンばかり食うとるわけじゃなかもんねえ。

佐和子、居間に現れ、

佐和子 あの、私、夕飯のしたくやら何やら。いろいろありますけん。そこにそうしておってもろうたら困るとですが。

悟 ええ？ ……。あ、そうか……。

佐和子、また、台所へ去る。

間。

悟は廊下にあがり込んで、

悟 佐和子さん。……おいはね、今の女房と離婚したってよかって思うとるとよ。

佐和子の声 ……。

……だいたいがそのつもりで、東京ば出て来たことやけん。

佐和子の声 ……。

悟 佐和子さん、おいはね、

佐和子の声 あがつて来んでください！こっちに来んでくだ

さい！

悟 ……おいはね、忘れきらんやつたとよ、あんたんことば

……。口ではどうでん言わるるけんね。信じてはもらえんや

ろけど……。おいは……。

佐和子の声 すいません。私、昨日はどうかしとったとです。

悟 え？

佐和子の声 すいません。

悟 ……何で、あやまると？

佐和子の声 すいません。

悟 だけん、何で、あやまるとね。何もあやまるようなことは

なかなかなね。

佐和子の声 困るとです。カン違いしてもろうたら、本当、私、

困りますけん。

悟 え？ どういうこと？ どういうことやろか。

佐和子の声 かえってください。

悟 え？

佐和子の声 おねがいですけん、かえってください。

悟 ……。

佐和子の声 ……。かえってください！

間。悟はぼんやりと、台所の方を見ている。

悟 ……ばってん、信夫君も……結婚したとやけん。もう、あ

んたも面倒ばみることもなかとよ。これからは、自分のこと
も、少しは考えんばとじゃなかと？ そうやる。

佐和子の声 ……。

悟 そっちに行つてよかかな。……よかよね、そっちに行つて
も。行くけん、そっちに。(ト、立つ)

悟は台所へ行くが、押し合いになる。

もちろん、佐和子が抵抗しているのである。台所からはじき
出された悟、今度は、佐和子を隣部屋へ押しやろうとする。

佐和子 ちょっと、何ばしよつとですか！

悟 ……。

佐和子 かえつてください……。

悟 ……いやばい。

佐和子 はよ、かえつてください。

悟 いやばい！

佐和子 な……、何ば言いよつとですか。あんだ、何ばしよつ
とですか、人の家で！

悟 かえりとうなかと！

佐和子 何でね！ かえらんね早よ！

悟 いやつて言いよるやろ。

佐和子 大声ば出すけんね、知らんよ、人の来ても。

悟 出すなら出してみんね。

間。

佐和子 あー！ 誰かー！ (ト、悲鳴をあげる)

悟、佐和子の口をふさぐ。佐和子、悟の指をかむ。

悟
イタタタ。

ト、二人、争う。必死である。
玄関先から、声。

声
ごめんください。

二人の動作は自おのずと止まる。

声の主は、丸尾悠志ゆうじ。信夫の生徒である。

丸尾の声 ……ごめんください。

佐和子 ちよつと、誰か来らした。

佐和子、とにかく急いで、乱れた服や髪を直す。
悟もあわてている。

丸尾の声 こんにちはー。

佐和子 (声を殺して) 向こう行かんですか。早よ、早よ。

ト、悟は、佐和子のなすがままに中庭に出される。

佐和子 はい。(ト、玄関へさげぶ)

丸尾がふらりと庭に現れる。坊主頭。夏の学生服。

裸足はだしの悟と息のあらい佐和子が迎える。

丸尾 ……こんにちは。

佐和子 こんにちは。

悟 こんにちは。

丸尾 こんにちは（ト悟に） ……あの、先生は。（ト佐和子に）

佐和子 まだ、かえつとらんとですが ……。（ト、ワンピース

の前のボタンをとめる）

丸尾 ……あ、そうですか。 ……。

佐和子 ……生徒さん？ 東校の。

丸尾 はい。丸尾といます。

佐和子 丸尾君。

丸尾 はい。

悟 あ、そう。平戸東校。私も、東校の出身なんだよ。 ……も

ちろん分校のね。

丸尾 そうですか。

悟 おじさん、先輩だよ。君、後輩、 ……（ト、笑う）

丸尾 はあ ……。何時頃もどられますか。（ト、佐和子へ）

佐和子 次のフェリーで来るては思っばってんねえ。

丸尾 そうですか ……。

佐和子 どうする。 ……待っとく？

丸尾 はあ ……。

佐和子 ね、 ……そうせんね。

丸尾 はあ ……。じゃあ、待たしてもらいます。

佐和子 どうぞ、どうぞ。

ト、佐和子、台所へ。丸尾、縁側に腰掛ける。立っている悟と対面して、居心地が悪い。で、再び立とうとするが、

悟 いいよ、いいよ……。すわっとかんね。……夏休みかあ……。

丸尾 はい。

悟 あ、そう……。何か知らんばってん、ジージー、ジージー
蝉の鳴くねえ……。(ト、腰かける)

丸尾 ……はあ……。

悟 何年生？(ト、靴をはく)

丸尾 三年です。

悟 じゃ、もう受験だねえ。

丸尾 はあ……。

悟 進学すると？

丸尾 はあ、一応。

悟 あ、そう。じゃ、勉強がよくできるんだねえ。

丸尾 いえ。

悟 おいは高校は出てすぐ働いたけん。うらやましかとよ。じ
ゃあ、補習とかあるとじゃなかと？

丸尾 ええ。

悟 あ、そう……。大変だね……。

丸尾 いえ。

悟 野球部。(ト、丸尾のポーズ頭を見て)

丸尾 はい……。

悟 あ、そう……。

間。

悟 野球部……。そうか……。……ポジションは？

丸尾 ピッチャーです。

悟 へえ、すごいなあ……。

佐和子、盆に麦茶をのせて現れる。

佐和子 どうぞ、こっちに。えっと、

丸尾 丸尾です。

佐和子 あ、そうそう、丸尾君、こっちに……。ね。

丸尾 あ、いえ、もう、ここで。

佐和子 よかけん、こっちに来てすわらんね！（ト、麦茶をちやぶ台に置く）

丸尾 はい。（ト、居間に来る）

佐和子 あん人にはうてあわんでもよかとよ。お客さんでも何でもなかとやけん。……お茶、飲まんね。

丸尾 いただきます。（ト、飲む）

佐和子 どうぞ。（ト、丸尾にニコヤカに）

佐和子、扇風機をつけて、丸尾に向ける。

佐和子 今日、かえって来るとよ、新婚旅行から。

丸尾 そうですか。

間。

丸尾 先生に話があって……。進路のことで。

佐和子 あ、そうね。

間。

佐和子 暑かねえ。

丸尾 ……はい……。

間。

悟 こう暑いと練習も大変だね。

丸尾 はあ。

悟 夏の予選があるんじゃないの？ 甲子園の……。

丸尾 はあ……。でも、まだ、試合したことはなかとです。部

員が三人しか、おらんもんですけん。

悟 ……あ、そう……。 ……大変だねえ……。

間。

悟 ……人のおらんごとになったとやろねえ……。おいたちのころはまあだ、こん島も活気のあるって、人も多かったですけど。

パンっと、佐和子、膝頭をたたく。

佐和子 ああ、もう蚊の来た。窓ばあけとつたら、蚊の入って来るけんねえ。本当、困るとよ。

ト、立ち上がり、縁側へ。

佐和子 (低く) 何ぼしよつとですか。

悟 は？

佐和子 そこで、何ぼしたかとですか……。いつまで、おるつもりですか……。

佐和子、台所の方へ去る。

間。

佐和子、蚊取り線香を持って来る。火をつける。

悟 じゃ、かえろかな。

佐和子 そうですか、何のおかまいもできず。それじゃ、失礼します。

悟 ……また、来ますけん。(ト、立つ)

佐和子 ……。

悟 また……来ますけん。(ト、佐和子を見据える)

佐和子 ……。

玄関先で、女の声とする。

声 こんにちは……。

悟 あ、誰か来たよ……。……誰か来た……。

佐和子、無言のまま立ちあがり、玄関へ。

悟 じゃあね。

丸尾 あ、失礼します。

悟 (ピッチャーをまねて) 野球、がんばってね。

丸尾 (受け取り) ……はい。

悟、去る。

玄関では声が出ている。二人の若い男女の声。

同じく信夫の生徒の沢柳次朗と七瀬真由美。

佐和子の声 あら、まだ、かえつとらんとよ。

七瀬の声 そうですか。

佐和子の声 もうすぐしたらかえって来るとは思うとばってん。

ああ、……えつと……丸尾君っていう生徒さんも来るとよ。

七瀬の声 え、丸尾君が？

沢柳の声 何や、あいつ、

七瀬の声 何で、何で丸尾君のおると。

佐和子の声 ま、ちよつとだけあがつて、一緒に待つとかんね。

七瀬の声 あ、はい。……どうする？ そうしようか。

沢柳の声 ……うん。

七瀬の声 じゃ、ちよつとだけ。

佐和子の声 どうぞ、どうぞ。

七瀬の声 失礼します。

沢柳の声 失礼します。

佐和子の声 (現れて) どうぞ。……丸尾君、お友だちのみえ
たよ。

七瀬、沢柳が現れる。佐和子は台所へ。

七瀬 あ、丸尾君、こんにちは。

丸尾 こんにちは。

七瀬 どうしたと。(ト、すわる)

丸尾 うん、ちょっと先生に用のあつたけん。

沢柳 おう。

丸尾 おう。

ト、沢柳、すわる。

丸尾 ……。何や、お前たちこそどげんかしたと。

七瀬 え、うん、ちよつと海に泳ぎに行つて来たと。そいで、

先生のところに寄ろうかなて思うて。

丸尾 海に……。二人で？

七瀬 うん、……。そのの、……。瀬戸浜せとのはま。

丸尾 へえ。

七瀬 先生のお嫁さんも見てみたかし。……。ねえ。

沢柳 え？ うん。

丸尾 あ、そいで、補習、来んやつたとか。

七瀬 ……大浦先生、何か言いよつた？

丸尾 うん、機嫌の悪かごたつたばつてん。ま、いつものこと

やけん。そいに、他にも休んどるとの何人かおつたけんね。

大丈夫じゃなかと……。別に……。

七瀬 あ、そう。……。やっぱり、うちらだけじゃ、なかつたご
たるね。

沢柳 え、うん……。

七瀬 よかつたね。

沢柳 ……。

丸尾、ニヤニヤと沢柳を見てしまう。

沢柳 ……何や。

丸尾 え、……いや、別に。

沢柳 何がおかしかったか。

丸尾 いや、何も、おかしゅうなかよ。

佐和子が現れる。彼らにお茶と菓子を持って来たのだ。

佐和子 はい……これ……。

三人 (口々に) どうも、すいません。

佐和子 何もなかけど、……。食べてください。

三人、挨拶あいさつをして、食べ始める。

佐和子 (七瀬の顔を見て) 日にやけて、どっか行って来た
と? (ト、ほほえむ)

七瀬 ……泳いで来たそうです。瀬戸浜で……。

佐和子 そうね。

三人が食べるのを見つめて、

佐和子 私もよう行ったとよ。

七瀬 そうですか……。

佐和子 うん。もう、夏休み中、真っ黒になるまで……。おかげで二学期になったらそばかすだらけになってしもうて。

(ト笑う) 子供の頃は、泳ぐぐらいしかあそぶことのなかねえ。弟と一緒によう行ったとよ。

七瀬 あ、先生とですか……。

佐和子 うん、弟も、けっこう泳ぎの上手じょうずかったとよ。

七瀬 へえ……。そうですか……。

佐和子 今はどうか知らんけど。……今なら沈んでしまうかもしれんもんねえ。

一同、笑う。

丸尾 経ヶ崎（せうがさき）には行かんやったと？ 岩場の先の。ホラ、小さ

か灯台のある。（ト、七瀬に）

七瀬 うん、……。沢柳君があそこはやめとこって言うけん。

丸尾 何でや。あそこがおもしろかどに。

七瀬 満ち潮になったら島になるけん、あぶなかとって。

丸尾 何で、泳いでもどつてくれればよかたい。

七瀬 潮の流れの速かどって。

丸尾 泳ぎきらんとじゃなかど。

沢柳 お前、何ば言いよつとか。なら、満ち潮のときに行つて泳いで来いよ。

丸尾 おう、よかよ。……経ヶ崎の灯台やろ、そげん離れとらんたい……。

沢柳 お前、知らんとか……。

丸尾 何が。

沢柳 去年の夏、本校の生徒の経ヶ崎であそびよつて、流されて死んだとぞ。

丸尾 平戸の本校のもんけんたい。大島のもんの流さるつもんか……。赤ん坊んときから泳ぎよるとに。

沢柳 じゃあ、絶対、行つて来いよ。

丸尾 よかよ。

沢柳 明日、学校に行つてみんなに言うどくけんね。

丸尾 おう、言え言え。そんなかり、泳ぎきつたらどげんするとや。

沢柳 何が。

丸尾 そいけん、おいが泳いでみせたら、お前はおいに何ばし

てくるつとや……。

沢柳 何でんよかよ……。どうせ泳ぎきらんとやけん。

七瀬 もう、よかけん、やめとかんね。

沢柳 経ヶ崎じゃ泳ぐもんじゃなかって、言い伝えのあるとぞ。

知らんとや。おいは、親父から聞いたと……。足ばひっぱる
もんのおるとつて……。

七瀬 ……え？

沢柳 そいけん、泳いでも泳いでもそんな人が手ば離さんけん、
つかれてしもうて、おぼれてしまうつて……。おぼれたら

最後……死体もあがらんとげな。

七瀬 そんなつて……。

沢柳 霊たい霊。……あそこで溺おぼれてしもうた人の霊が、今で

も助けば求めて、引っぱるとやろ。(ト、七瀬をつかむ)

七瀬 ちょっと、やめんね……。

佐和子 昔ね、長崎の殿様に一人のきれいか娘のおらしたとつ
て……。きれいか人やつたとぼつてん、ちよつと頭のおかし
ゆうしてね。毎晩、毎晩、殿様のところに忍んで来るとな
つて、殿様も自分の娘とおかしなことになつては困ると思
うて、こいはもうどうかしとるけんつていうて、こん大島に娘
ば流さしたとつて……。娘は十九のときにここにきて五年間、
なんとか我慢して、父親のことば忘れようとしたばつてん、
とうとう我慢しきらんごととなつて、満月の夜、満ち潮の海ば
長崎まで泳いで渡ろうて思うたらしか……。ばつてん、力つ
きて沈んでもうたと……。そいが、ちようど、経ヶ崎のと
こやつたとよ。

七瀬 ……丸尾君、やっぱりやめとかんね。

丸尾 ……。

沢柳 何や、おじけづいたとか……。
丸尾 ……うんにゃ……。

ト、玄関先から声がする。

信夫の声 ただいま。

佐和子 あ、かえってきた。(ト、立ちあがる)

佐和子、玄関へ。「おかえりなさい」という声。

丸尾 ……。

七瀬 ……。(ト、玄関の方が気になる)

沢柳 丸尾、明月みんなで見にくけんね。わかっとなるやろな。

丸尾 ……。うん。よかよ……。

七瀬 ……。ばってん、……本当、……かわいそかよね、そんな女の人も……。

信夫の声 ……誰か来とると？

佐和子の声 うん、生徒さん。

信夫の声 ええ？ 何でまた……。

佐和子、信夫、直子と現れる。

丸尾 ……お邪魔してます。

信夫 何や、お前たち、何ばしよつと。

七瀬 先生のお嫁さんば見に来たとです。

信夫 ええ？

佐和子 直子さん、疲れたでしょう。

直子 いいえ。(すわって) こんにちは。
生徒たち こんにちは。

佐和子 フェリー、ゆれんやった。

信夫 うん。夏の海けんねえ。

七瀬 ……奥さん、きれいかですね。

信夫 あ、そうや……。そうかな……。(ト、てれる)

沢柳 あ、先生、赤うなった。

信夫 な、何ば言いよつとや。

一同、笑う。……と、七瀬だけ真顔になる。

佐和子 信夫、仏様。

信夫 え？ ああ……。

佐和子と夫妻は隣部屋へ。

……静かな間。

七瀬 ……もう、大丈夫と、鼻血。(ト、おこったように)

沢柳 うん。

七瀬 沢柳君ね、海に飛び込んだらいきなり鼻血の出たとよ。

丸尾 ええ？ ……へえ……。

間。鈴が鳴る。

沢柳 ……何や、何かおかしとか。

丸尾 何もおかしゆうなかよ。

沢柳 笑うたじゃなかか。

丸尾 笑うとらんよ……。おいは、だいたいがこげん顔ばしと
つと。……生まれつきたい。

沢柳 ……。

七瀬 カッコ悪かったと。沢柳君……。(ト、ポツリと言う)

丸尾 ……。

沢柳 ……。

丸尾、たえきれず、クスリとやってしまう。

沢柳、丸尾につかみかかる。

丸尾 何や。

沢柳 お前、何ば、笑いよつとか、さつきから……。

丸尾 笑いよらんで言いよるやろ。

二人、もつれ合う。信夫、佐和子、直子と現れ、

信夫 こら、こら、何ばしよつとか……。

佐和子 これは(荷物)二階でよかと？

信夫 うん。

直子 あ、義姉さん、持ちます。

佐和子 よかよ、こんくらい。

直子 ばってん。

信夫 こら、やめんか！ 丸尾！ 沢柳！

佐和子 よかねえ、男の子は元気で。

佐和子、直子、二階へ。

信夫 あ、姉さん、……ちよつと……。

丸尾 鼻血男！

沢柳 やかましか！

もつれ合う二人。

信夫 おいおい、やめんか。(ト、止めようと)

七瀬 先生……。

信夫 うん？

七瀬 私、先生が結婚したけん……沢柳君とつきあうことに決めたとです。

信夫 ……は？

七瀬 よかですか、それでも……。

信夫 ……よかですか……言われても……。 (ト、苦笑する)

七瀬 よかとですか？答えてください。

信夫 何ば言いよつとか、いきなり。

七瀬 答えてください！

間。……男子は自ずと離れる。

佐和子 お茶でも飲んでゆつくりせんですか。(ト、廊下を通りすぎる)

直子 はい……。あ、でも、義姉さん、私、やりますよ。(ト、現れる)

佐和子の声 よかよか……。すわつとかんですか。疲れとるとやろ。

直子 はあ……。すいません。(ト、来て、すわる)

直子、立っている信夫を見る。

直子 ……どうしたと？

信夫 え？ いや。(ト、すわる)

えっと、……。それで？ ……。(ト、生徒たちに)

間。七瀬は信夫を見つめている。

信夫 丸尾。

丸尾 はい！

信夫 何か用のあったとじゃなかとや。

丸尾 はあ、ちよつと、進路のことで。

信夫 うん、どうした。

丸尾 えっと……。長崎大学を受験するのをやめて、東京の私立大学を受験しようと思うとです。

信夫 ……。何で……。

丸尾 長崎大には文学部のなかとです。だけん、文学部のある大学の方がよかかなくて。

信夫 文学部のなかと、そげんこと、初めからわかつとるじやなかか……。何ば今さら言いよつとか。

丸尾 はあ……。

信夫 そいにお前、首都圏の私大は金のかかるけん、地元の国公立の方がよかて、言いよつたじやなかや。

丸尾 はあ……。

信夫 何ば言いよつとか……。

間。

信夫 親には言うたとか。

丸尾 いえ。

信夫 そんなら、早よ、言うてみんなばたい。そつちが先やろが……。おいが、入学金ば出すとじゃなかとぞ。

丸尾 ……はあ……。

信夫 話は、とにかく、それからじゃなかか。……うん？ そ
うやろ。

丸尾 はあ……。

信夫 はあ、じゃなかやろが……。沢柳、お前は何か。

沢柳 はい？

信夫 何しに来たとか……。

沢柳 はあ……。……あの……。……(ト、うつむく)

信夫 うん？……。

沢柳 いえ……別に……。

信夫 ま、よかけど……。

沢柳 ……。

信夫 ばってん、お前たちみんな、受験生ってことば忘れんご
とせんば。

間。

七瀬 先生……。

信夫 ……うん？

七瀬 沢柳君は、私と海に行つて来たとです。その瀬戸浜で

す。二人つきりで……。

信夫 ……。あ、そう……。

七瀬 新婚旅行はどこに行って来たのですか？

信夫 ……え？ ……えっと……。

直子 北海道です。

七瀬 ……。そうですか……。

直子 ね、……。おみやげば差し上げたら、ホラ。あつたじゃ

なかですか……お菓子か何か。

七瀬 いません。……子供じゃなかとです。

間。佐和子が現れる。お盆の上には、お茶と水ようかん。麦茶を直子と信夫に……。

佐和子 ……水ようかんいらんですか。(ト、盆を置く) ちょ

っと冷えとらんかな……。さっき、冷蔵庫に入れたばかり

やけん……。取って食べてください……。

誰も取ろうとはしない。

佐和子 あら、……。いらんとう？

七瀬 先生……。

信夫 ……何や……。

七瀬 沢柳君と、私、キスしてきました。沢柳君がせまつてき

て……私、抵抗しきらんで……。強引やったとです。だけん

……私……。ねえ、そうやもんね。(ト、沢柳へ)

沢柳 え？ ……違うやろ。

七瀬 何が違うとね。したじゃなかね、……。舌まで入れて、鼻

血まで出して……。しとらんと？ あれは何やったと？ キ
スやろ、キスしたい！ ……したとです、先生……私たち……
どうしたらよかですか……。どうしたらよかですか。教え
てください。

沢柳 ……。

信夫 七瀬……。お前……どげんしたとか……。何かあったと

か……。 (ト、丸尾と沢柳へ)

男子二人 …… (ト、首をふる)

間。

佐和子 丸尾君……。ホラ、取って食べんね……。何がよか？

……。チェリー(水ようかんの中身)がよか？

丸尾 はあ……。

佐和子 じゃあ……オレンジに、リンゴに……はい、パイソ

(ト、各人にそれぞれ置いていく) ……直子さんは？

直子 ……あ、何でもよかですよ……。

佐和子 グレープでよか？

直子 はい……。すいません。(ト、受け取る)

丸尾 いただきます。(ト、食べる)

佐和子 どうぞ、どうぞ。

信夫 姉さん……。駐在所の杉本さんにさっき、そこで会った

とばってん……。

佐和子 ……。何で？

信夫 清川の悟さんのことで……。

佐和子 知らんよ、私は……。

信夫 どういうことね……。

佐和子 何がね。

信夫 悟さんが、

佐和子 知らんって、私は……。何ば言いよつとね。……今は

よかたい、そげんこと言わんでも……。丸尾君……。お茶

……。麦茶入れようか……。

丸尾 あ、すいません。

丸尾のコップに佐和子、茶をそそぐ。

丸尾 あの……。先生から、親父に言うてもらえんですか。

信夫 何ば！（ト、声が大きくなる）

丸尾 ……だけん……。さっきの……。

信夫 何ば言いよつとか、何でおいが言わんばとか。自分で言え。

丸尾 はあ……。そいが、親父、実は大学に行くことも反対しよるとです。

佐和子 あらあ……。それは困ったねえ。

丸尾 ええ。家の仕事ば手伝うた方がよかつて言うとです。じ

やなかつたら水産の専門学校やったら何とか金ば出すって。

信夫 お前、このあいだの面談じゃ、そげんこと言いよらんや
つたじゃなかか……。

丸尾 はあ……。去年の台風で、生けすのひとつこわれたでし
よう。そいが今年になって響いてきたごたるとですよ。

信夫 ばってん、親も納得の上の進路調査やったとけんなあ。

丸尾 はあ……。

佐和子 ま、そう言わんで、何とかしてやらんね。

信夫 ……。今さら、そげんこと言われても、おいも困るとぞ。

七瀬 何で、困るとですか……。

信夫 ええ？

七瀬 何で、先生の困ることのあるとですか……。先生は、書類ば、ちよつと書きかえるだけですむじゃなかですか。丸尾君にとつては一生の問題ですよ。これは。先生はただ、めんどくさかだけじゃなかとですか。何でも……。何に対しても……。

間。

信夫 お前、さつきから、本当……何ば言いたかとか……。

七瀬 何も言いとうなかです。

信夫 何が、めんどくさかとか……。おいが、何に対して、めんどくさかとか。

七瀬 ……。

佐和子 ……ね、もうよかたい。あなたもそれ食べて、……ね、ちよつと気持ちば落ちつけて……。直子さん、食べんと？
食べて、遠慮せんで。

直子 あ、はい……。

佐和子 どつか具合の悪かとじゃなかと、顔色の悪かよ。

直子 いいえ、大丈夫です。

佐和子 そうね。

信夫 フェリーに酔うたとやろ。……な……。 (ト、直子)

佐和子 ゆれたと？今日。

信夫 うんにゃ、全然……。

佐和子 ばってん、慣れん人にはこたえるけんねえ。

直子 本当、大丈夫です。

佐和子 無理せんでよかとよ。

直子 ……はい……。 (ト、食べる)

間。

信夫 ま、とにかく、九月の実力テストの結果ば見てから考え

ようで……。 な、丸尾……。

丸尾 はい。

信夫 だいたいが、お前も成績次第じゃ、大学に行かるつかどうかもわからんとやけん。

丸尾 はあ……。

信夫 な、ちよつと待ってみよう、九月まで。それからたい。

丸尾 はあ……。

信夫 いいか、それで……。

丸尾 はい……。

七瀬 ばってん、私が妊娠しとったらどげんするとですか。

間。

信夫 ……沢柳……。 お前、

沢柳 違います。 ……絶対に……違います。

間。

ト、直子、吐き気がして立ちあがり便所へ走り去る。

信夫 ……フェリーに酔うたとやろ。

ト、信夫、そのあとを追う。

七瀬 ……私、かえります。

佐和子 あ、そう……。そうする？そうしたがよかね。

七瀬 失礼します。

佐和子 じゃ、気をつけてね……。

七瀬 はい……。お邪魔しました……。 (ト、立つ)

七瀬、廊下で立ちどまり、

七瀬 ……。沢柳君、おくつてよ……。

沢柳 ……。

佐和子 ホラ……。行ってやらんね、早よ……。

沢柳 はあ……。失礼します。(ト、立つ)

沢柳、七瀬のところへ行く。

七瀬、こらえきれず、泣いてしまう。

沢柳、七瀬の肩を抱き、去る。

佐和子 ……丸尾君……。

丸尾 はい？

佐和子 麦茶……。もう、いらん？

どこかで、蝉が鳴いている。

暗転。

九月、初旬。夕方。

居間には和美がすわり、縁側に腰かけている駐在所の警官、杉本と話をしている。

杉本 (茶を飲みつつ) そいで、二人は、とうとうかけおちば決心したらしかとです。長崎に渡ろうって……。

和美 まさか。(ト、笑う)

杉本 いや、本当ですって、そげん、聞いてきたとですもん。

神浦の港からじゃ目立ってすぐ見つかるけん、その経ヶ崎に小さか船ば持って来て、夜中じゅう、来らすとば待つとつたとつて……。佐和子さんの来らすとば……。

和美 へえ……。

杉本 そいで、待っても待っても、来らっさんやっただけん……。

ま、そいけん、ダメになつてもうたらしかけど……。

和美 そうですか……。

杉本 そうですか……全然知らんやっただですか？

和美 ええ。

杉本 二人が高校の時、つき合いよつたとは知つとるとでしよう。

和美 いいえ。

杉本 そいも知らんやっただですか？

和美 知らんやつたもなにも、私まだ、小さかったけん。そげんことはわからんとですよ。

杉本 あ、そうか……。ばつてん……小さかったって……どの

くらいです？

和美 ウーン……。

杉本 ……中学生ぐらいでしょ。

和美 ……。まあ、そのくらいですか……。

杉本 そんなら、そろそろ、そげんこともわかるころじゃなか
ですか……。

和美 ……そうかもしれんけど……。わからんやつたでしよ
うね。自分のことで精いっぱい……。うちの兄妹はみんな
そうですよ……。姉さんもそげん恋のごたることばするヒマ
もなかつたとですよ……。何かかんかと家のことば全部しよ
ったけん。私たちも手伝いはしましたばってん……。この
家のことは、自分でせんば気のすまんとですよ。そいに、好
きやつたとでしようね、何やかやと世話するとの……。

杉本 ……そうですか……。

和美 ……そいけん……お嫁にも行きそびれて……。

杉本 ああ。

間。

杉本 ……何か、清川さんとも、ちやうど漁師ばやめてしも
うた頃やつたとでしよう……。

和美 ばってん……。そげん、話、どっから聞いて来らすとで
すか……。

杉本 え？ ま、よかですたい。

和美 川添のおばちゃんでしょう。

杉本 ええ、まあ、あそこもそうですけど……。私のごたるよ
そもんはいろいろと教えてもろうとかんば、いざというとき

困りますけん。

ト、そこに野良着姿の佐和子が、鼻歌まじりに庭に現れる。

佐和子 あら、こんにちは……。

杉本 お邪魔しております。

佐和子 いいえ……。お茶か何か。

杉本 ああ、もう、いただいとりますけん。……畑ですか？

佐和子 ええ……。

杉本 何ば作りよらすとですか。

佐和子 まあ、何やかやと……。

杉本 ようきばらすですねえ。

佐和子 いいえ……。

ト、家の裏手へまわり、台所の方から、

佐和子の声 あんた、まだ、かえらんでよかと？

和美 うん……。よかと。

佐和子の声 もう、起きて来らすとじゃなかと？

和美 まだやろ……。姉さんが、留守番しとけて言うけん、お
ったとよ。

佐和子の声 ああ、ごめん、ごめん。

杉本 ……お義父さん、まだ、悪うあらすですか……。

和美 ええ……。まあ……。最近、寝てばかりになってしもうて
……。

杉本 そうですか……。 (ト。立つ) ……それじゃ、これで。

和美 え？ あ、そうですか……。

杉本 ……何か、あったら……。駐在所まで知らせてください

……。何でん、よかですけん……。気のついたことのあれば

……。

和美 はあ……。ばってん、そげんことは何もなかって思います
が……。姉さん、杉本さんのかえらすってよ。

「はい」と、奥から返事……。

杉本 ……心配かですね。

和美 え？ ……。

杉本 早よ、ようならつせばよかですけど……。

和美 ……ああ……。はあ……。

佐和子、着がえて現れる。

佐和子 あら、もう、かえらすとですか？

杉本 ええ、……ごちそうになりました。

佐和子 いいえ、何のおかまいもできず……。ばってん、何か

あつたとじゃなかですか。

杉本 ああ、いや……。ちよつと、寄っただけですけど。ま、

詳しくは和美さんから聞いてください。

佐和子 ああ、そうですか……。

杉本 それじゃ、失礼します。

佐和子 あ、どうも、……失礼します。

和美 さよなら……。

杉本、去る。和美、杉本の飲んでいた湯のみを台所へ持ってゆく。

佐和子 ……何やったと？（ト、和美に）

和美 え？ ……うん……。〔現れて〕悟さんに搜索願いの出

とるらしかよ。

佐和子 フーン。

和美 清川の家にもおらつさんとして……。捜してもどこにも

おらんけんていうて……。

佐和子 そいで、何でうちに来んばとね……。

和美 知らんよ、私に言っても……。

佐和子 いやらしか……。何で、私ばかり調べんばとやろか。

和美 いろいろ、噂うわさする人のおるとよ。

佐和子 何でね……。何も関係なかとよ……。……誰が、そげん話ばするとやろか……。ほんとに……。いっちょよんすかん。

和美 仕方なかよ……。

佐和子 何が……。何が仕方なかとね。

和美 昔のこともあるし、

佐和子 昔んことは関係なかやろ。

和美 だけん、私に言わんでよ。知らんよ、私は……。

佐和子 あんたまで、何か、うたぐりよるとじゃなかやろね。

和美 そげんことはなかよ……。

佐和子 なら、何で、昔んことば言うたり、仕方なかとか言うたりするとね。

和美 別に、昔のことは言うたらんよ。

佐和子 杉本さんに言うたじゃなかやろね。

和美 言わんよ、そげんこと……。知らんもん、私……。本当に……。

佐和子 何で、あんたが、知らんことのあるとね。

和美 知らんて、何も……。何かあつたとね……。悟さんと何かあつたと、やっぱり……。(ト、わざと聞く)

佐和子 ……。

和美 兄さんと違うて、私は何も知らんと……。別に知らんてもよか。知りとうもなかもん、そげんこと……。

佐和子 ……あんた、もう、早よ、かえらんね。

和美 ……。言われんでもかえるよ。

間。和美、佐和子を見る。

和美 ……姉さん……。結婚せん？

佐和子 何ば言いよつとね。

和美 ばってん、ずうつと、ここにおるわけにもいかんやろ。

佐和子 知らん、そげんこと。

和美 知らんつて言うとするわけにもいかんとよ。仕方なかって言うたとはね、そんなこともあるとやけん。姉さんがそげんふうやけん、あることなかこといろいろ言う人のおるとやろ。

佐和子 関係なかない。

和美 関係あると。ホラ、あん話。一回だけでよかけん、会うてみんね。幸一さんの大学の先輩。

佐和子 いやばい。何ね、いきなりそげんことば言い出して。

今は関係なかやろ。

和美 むこうは会うてみてもよかて言いよるとつてよ。幸一さんこん前、電話で話したとつて……。

佐和子 よかて、もう……。

和美 何でね……。よか人よ……。大阪にマンションもあつて……言うことなかじゃなかね。

間。和美、外を見る。夕方近くの空。

和美 姉さんはここぼ出て、どっか遠くに行った方がよかとよ。

佐和子 ……何でね。

庭に、幸一が、ぼんやりと現れる。

幸一 やつぱり、ここやったとか。

和美 うん。……どうでした、始業式……。

幸一 別に……。いつもとおんなじたい。

佐和子 こんにちは。

幸一 こんにちは……。

和美 今ね、このあいだの話ばしよったと……。あなたの先輩の……。

幸一 ああ……。

和美 ……姉さん、ちょっとノリ気のごたるよ。

佐和子 何ば言いよつとね。……違うとですよ、……ホント、気になさらんでくださいねえ……。

幸一 ……。

和美 ……。何、どげんかしたと？

幸一 お前、ここで、何ばしよつとか……。

和美 何て、別に……。え、どうかしたと？ お義父さん……。

幸一 ……。何か、玄関先に出て来て、ポーツとしとると。中に入れて言うても入らんけん、無理矢理押し込んで来た……。ズボンも、何もかんも、脱いでしもうとるし……。

和美 ……そいで……。

幸一 部屋にいつて寝ろつて言うても聞かんけん、ほつといて来た……。

和美 何で、ほつとくとですか……。

幸一 うん……。……どうしよう……。

和美 どうしようつて……。あなたのお父さんじゃなからですか。

幸一 うん……そうばってん。

和美 ……ここに呼びに来るひまのあったら、ちょっとは、自分でどけんかしたらどうですか……。

幸一 ……。

和美、立ちあがり、庭に出て、去る。

幸一は、ただ、ぼんやり立っている。

佐和子 ……幸一さん……。

幸一 ……。(ト、立っている)

佐和子 幸一さん！

幸一 ……。

ト、玄関の方から、庭へ直子が現れる。買物カゴを持っている。

直子 ただいま。

佐和子 あ、おかえり……。

直子 こんにちは……。(ト、幸一へ)

幸一 ……。(ト、動かない)

直子 ……。どうかさしたとですか？(ト、佐和子へ)

佐和子 ……うん……。……幸一さん……。

幸一 ……。何かもう、違う人のごたるとですよ。

ト、誰にというわけでもなく言い、幸一は去る。

佐和子 ……大丈夫とやろか……。

直子 何かあったとですか？

佐和子 ……うん……。大浦のおじちゃん……。

直子 ああ……。

佐和子 おらした、平松さん。(ト、直子に)

直子 え？ ……ええ、……トウキビばもろうて来たとですよ。

佐和子 あらあ……。そうね。

直子 ゆがいて、食べましようか。

佐和子 うん、そうしようか。

直子、家の裏手から台所へ。

佐和子は洗濯物を取り込みに行く。

もどつて来て、居間でたたむ。台所から直子も来て、その作業に参加する。たたまれた白い洗濯物は、ある場所できちんと、積み上げられてゆく。

佐和子 ……どうね、具合は。

直子 ええ、よかですよ。……明日、病院に行ってきますけん。

佐和子 そうね……。……何もなかならよかけど……。

直子 大丈夫ですよ。

佐和子 ……そんならよかけど……。

二人、洗濯物をたたんで、

直子 ……さつきね。海の、何かこう、キラキラしとって……。

……びっくりしました。

佐和子 ええ？

直子 見とれてしもうて……。あげん、海のきれいかもんては

知らんやったもんですけん。

佐和子 ちょうど、今、西陽のあたるけんねえ。

直子 ……くらくらして、……しばらく、ぼんやりしてしまおうて……。

佐和子 ……そうね……。

間。二人、たたむ。

佐和子、笑う。

直子 え？

佐和子 いや……。私ね、昔、溺れかけたことのあるとよ。

直子 ええ？

佐和子 小学校六年生ぐらいやったかな、その経ヶ崎で……。

信夫と一緒に岩場であそびよったら満ち潮になって、取り残されてしもうたと。どんどん波はくるし、泳ごうにも流れは速かしね……。もう、ダメかて思うたとよ。

直子 へえ。……それで、

佐和子 信夫が、私の手ばひいて向こう岸まで泳いでいってくれただけん助かったとよ。

直子 そうですか……。

佐和子 今、考えれば、よう助かったもんたいねえ……。あそこはよう、人の流さるつとこやったけん……。岸にあがってから、二人してぶるぶるふるえて、歯もガチガチいうて、……ばってん、しばらくしたら信夫が、私の顔見て笑いだして、

直子 え、何ですか……。

佐和子 私も、信夫の顔見て笑い出して、……おかしかったとよ。二人して唇の青うしとったけん。

直子 ああ……。

佐和子 ……本当……何やったとやろか……。

佐和子、笑っている。……直子、暗くなった部屋に灯あかりをつける。

ト、縁側に人の気配。驚いて、直子、悲鳴をあげる。

いつの間にか、現れた悟が、こちらに背を向けすわっていたのだ。

佐和子 ……いつからそこにおったとですか。

悟 ……。(ト、背中を見せたまますわっている)

間 ……ト、やがて、

信夫の声 ただいま。

ト、玄関から、廊下を入れて来る信夫。

悟に気づいて立ちどまる。……息を呑む。

間。

しかし、誰からともなく、顔を見合わせたり、周囲を見たりする……。何かにおいがするのだ。

信夫 おい……何か、ふきよるとじゃなかや！

直子 あ。(ト、立ち)

台所へ走る直子。

悟 ……佐和子さん。

佐和子 ……はい……。

悟 話のあるとばってん。

佐和子 ……何ですか……。

間。

悟 信夫君……。少しの間、お姉さんと二人っきりにしてもらえんやろか。

信夫 ……いやです。

悟 何で……。 (ト、苦笑する)

信夫 いやです。……おい、直子!

直子 (縁側に顔を出し) はい……。

信夫 電話、

直子 はい?

信夫 電話しろ。

直子 ……どこに？

信夫 警察にたい！

直子 はい。(ト、電話へ)

悟 奥さん、やめてください。

直子 ……。(電話の前で止まる)

信夫 早よ。

悟 奥さん、おねがいです……。すぐ、終わりますけん。

直子 ……。(動けない)

信夫 ……早よせんか。

ト、いきなり電話が鳴る。

しばらく鳴って、直子あわてて取る。

直子 もしもし。……はい、そうですけど……はい、はい。

ちよつと待ってください。……。(ト、受話器をはずし)あな

た……生徒さん、分校の……丸尾さんとかいう……。

信夫 (受話器を取り) もしもし……。何や……。うん、うん、
うん……。うん……。うん……。せいけん、それは結果の出でから
って……。え? ……何で……。……何ば言いよつとか、お前
は! (ト、イライラしている)

悟は縁側にあがり、ずんずん来て佐和子に対面する。

悟 ……。 (ト、佐和子を見据える)

佐和子 ……。何ですか……。どげんしたとですか……。

信夫 だけん、それはお前、自分の責任やろが。……ばか!

まだに決まっとるやろが、今日終わつたとぞ……。ちよつと、
待つとけよ、そしたら結果の出るけん……。知らんて、おいは
そげんこと! うん……。うん……。うん……。

悟 ……いろいろ、考えたとぼつてん……。おいは、やつぱり
あんたんことば、どうしても忘れきらんとよ……。

佐和子 ……。

悟 ……おいと一緒に来てもらえんやろか。

佐和子 ……。だけん、それは、もう……。何度も……。

信夫 (悟と佐和子を気にして) ……うん……。うん……。え?

……何て? ……。うん……。ま、とにかく、明日、……学校
で……。な……。電話じゃ何やけん……。よかよか、かわらんで
……。明日、昼に、おいが、お父さんに電話しとくけん。
……じゃ、切るぞ。……うん……。うん……。ま、それも明日。
ね、……よかか……。それじゃ。(ト、切る)

信夫、そのまま、立っている。

信夫 ……あ、……あの……かえってください。

悟 ……君には関係のなかことやけん。

信夫 何ですか。……姉は、迷惑しとるとです。もう、つきまとわんでください……。

悟 ……。そうやろか……。姉さん迷惑しとるとやろか……。

(ト、チラリと佐和子を見る)

佐和子 ……。

悟 ちゃんと、自分の気持ちば、言わんね。……本当は迷惑しとらんとよね……。ね、そうやろ……。迷惑どころか、

佐和子 しとります……。迷惑です。

悟 ……何ば言いよつとね。

佐和子 かえってください。

間。

信夫、受話器を取る。そしてダイヤル。

悟、すかさず押さえて、

悟 何ばしよつとね。

信夫 ちよつと、やめんですか。……関係なかでしょう。(ト、再び電話しよう)

悟 (止めて)今は、やめとかんね。

信夫 だけん、あなたには関係なかでしょう。(ト、押す)

悟 どこに電話すつとね。(ト、つかみかかる)

信夫 どこでんよかじゃなかですか。(ト、押しかえす)

悟 やめとかんね、今は。

信夫 ちょっと、何ばすつとですか。

悟 やめとかんね。……今は、電話は。

信夫 何ですか……。何なんですか、さつきから！

悟 やめとかんね！

二人、つかみ合いとなる。はげしくはないが、力は妙に入っている。

二人の足の力で、さきほどの洗濯物がけちらされてゆく。それを
見えて、佐和子、たまらず。

佐和子 ……ちょっと……。やめんね……。ちょっと……。

……やめんねって！（ト、叫ぶ）

二人、止まる。……たたずんでいる、直子。佐和子、散らばった洗濯物をたたみ直す。きれいに、細心の注意を払いつつたたむ、佐和子。

ト、電話が鳴る。受話器を取る信夫。

信夫 ……はい、平岡です。……もしもし……。もしもし……。

……もしもし、（ト、切れ、腹だたしく置く）

悟 （そのすきに）……ねえ……。どうやろか……。一緒に来てもらえんやろか……。（ト、佐和子につめ寄る）

佐和子 ……。（ト、たたむ）

悟 おいはあん夜、あんたんことば、待ちきらんやったとよ。

一人でもよかけん、こん島は出ていこうって思うたと。ばつてん、そいは、間違いやつた。……やつと、そいに気づいた

とよ。今になって、この歳になって、外に出ていろいろしてきて……やつとわかったと……。おそうなか、今からでも……、そうたい……。あきらめたらいかんて思うたと。そいけん、おいは、あきらめんよ、絶対、あきらめんけん。あんなんことば……。

また、電話が鳴る。

佐和子 ……私は、もう……ここば出とうなかですけん……。

悟 ……ばってん、あんどき……。……約束したじゃなかね。

佐和子 もう、忘れましたけん、そんなことは……。昔のことですけん。

電話が鳴っている。信夫は、二人を見つめたまま。……と、あわてて直子が取る。

直子 ……もしもし……もしもし……。……はい。……はい、

そうです……。はい？ ……え？ ……ええ？ ……は

あ……。あの……。……どなたですか？ ……あの……、

え？ ……何？ ……え？

悟 じゃあ、この間のことは、何やったとね。

佐和子 ……。(ト、ひたすらたたむ)

直子 (受話器を耳からははずし) あなた……あなた……。……あなた。

信夫 (気づいて) ……何や！

直子 ちょっと出てください。

信夫 誰や……。

直子 知らん。何か……とにかく、平岡ば出せって……。

信夫、受話器を取る。

信夫 もしもし……。……そうばってん……。え？ ……別に、
……彼女とは……。何の関係もなかよ……。そこに、七瀬はお
るとか……。もしもし……。ちゃんと答えんか……。お前た
ちはどこのもんか……。七瀬にたのまれたとか……。じゃ、
何で、こげん、強迫のごたることばするとか。……何ば、言
いよつとか。そげんこと言われても、おいは、どげんもなか
と！ ……誰か、お前たちは……。分校の生徒か！ ええ？
……こら、答えろ！ ……答えんか！

悟、佐和子の腕をつかみ、廊下へひきずり出そうとする。佐
和子は、抵抗する。四散する洗濯物。

佐和子 ……やめんね。……ちょっと……。洗濯物……。洗濯物、

信夫……。信夫……。ノブオ！（ト、信夫に向かって叫ぶ）

信夫、電話を切り、佐和子をかばい、悟を庭へ突き飛ばす。

悟は転んで、庭へ落ちる。

佐和子、信夫の背中にかくれている。いや、それは、もう、
抱きしめていると言った方がいい。強く……。

……直子は、それを茫然と見るしかない。

悟、立ちあがる。

悟 ……何ばすつとか！

悟、猛然と信夫に襲いかかり、庭にひきずり出す。つかみ合
いになる。

佐和子 ノブオ……ちよつと、やめんね……やめんね。

直子 ちよつと……やめんですか……。あぶなかけん……。や
めんですか……。

直子、庭において、二人を止めようとする。

直子 ……義姉さん、……警察に電話してください。……義姉
さん！

佐和子 ……はい？ ……。

直子 電話、

直子、二人に押され、はずみで緑側のガラス戸にぶつかる。

佐和子 ……直子さん！

信夫、ふりほどき、直子を抱きかかえる。

信夫 ……大丈夫か……。

直子 ええ……。 (ト、自分で立つ) 大丈夫……。 (ト、土を払う)

間。ト、佐和子、信夫、直子が、庭にたたずむ悟を見る。

悟 (所在なく) ……すいません……。 ……ばってん、

間。

悟 ……こいじゃ、何も始まらんじゃなかね。 ……何かば、始
めんばとじゃなかつたとね。 ……このままじゃいかんけん何
かば始めるために、何かば失うつもりじゃなかつたとね。
 ……こいじゃ、いつしよたい、今までと ……。何も、始まら
んばい ……。おいも ……、あんたも ……。

あああー！ (ト、叫び、地団駄^{じだんだ}を踏む)

間。 ……悟、ぼんやりと一礼し、ひとり去る。

佐和子は、何ごともなかつたように、再び洗濯物をたたむ。

信夫 ……姉さん、どういふことね、 ……これは ……。

ト、また電話が鳴る。 ……しばらく鳴っている。

佐和子 (たたみつつ) ……直子さん ……電話 ……。

直子、電話へ。

信夫 出んでよか。 ……また、どっかのバカが、かけて来よ
とやけん。

直子、電話の前で立ちどまる。

佐和子、ひたすら洗濯物をたたむ。

電話は鳴りつづける。

信夫 ……。(ト、佐和子を見ている)
佐和子 ……。(ト、たたむ)

ト、電話を取る、直子……。

受話器からは何やら、罵声ほせいがもれている。

直子 (低く、受話器に) ……やかましか。(ト、力まかせに切る) ……あ……。(ト、小声で)

信夫、佐和子は、直子を見る。

直子の中で、何かが流れ落ちたような気がして……。

直子、ゆっくりとその場にうずくまる。

暗転。

4

二日後の夜。闇の中で、電話が鳴っている。

やがて、それが遠ざかると、暗い居間がぼんやり浮かぶ。外は明るい。庭には月光が射し込んでいるのだ。

玄関で扉の音がして、信夫が廊下に入って来る。居間に来て、上着を脱ぐ。ハンガーにかける。顔をなぐられ、足をひきずり、シャツなどに泥や血がついている。

隣部屋から救急箱と手鏡を持って来て、電灯をつけ、体の治療を始める。オキシドールをつけ、しみる顔で手鏡をのぞく。やがて、寝間着姿の直子が、二階から降りて来て、ぼんやり

廊下に現れる。

直子 あら……。おかえりなさい。

信夫 ……ただいま。

直子 いつ、かえったと？

信夫 さつき。……。

直子 あ、そう……。知らんやった……。

信夫 どうや、具合は。

直子 うん……。大丈夫……。一週間ぐらい寝とけばよかて、
お医者さんも言いよらしたけん。

信夫 あ、そう……。

直子 ……すいません、心配かけて……。

信夫 何で……。……何も、気にせんでよかとぞ……。

直子 ……はい。……。(ト、立っている)

信夫 ……何。

直子 え。ちょっと、のどのかわいたけん。

信夫 そうや、水、持って来ようか？

直子 よかですよ……。 (ト、苦笑して台所へ)

直子、水差しとコップを持って、ちゃぶ台に来てすわり、コップに水を注ぎ、ゴクゴクゴクと飲み干す。

信夫 ……姉さんは。

直子 え、おらっさん？

信夫 うん。

直子 あれ。どこ行かしたとやろか。

間。 ……水差しからコップに水を注ぐ直子。

直子 ……ホント、何でやろ。

信夫 めずらしかね、この時間におらんで。

直子 あ、そうか、御飯食べとらんと？

信夫 うん、ま、よかよ、自分で何か作って食べるけん。

直子 食べて来んやったと……。

信夫 うん……。

直子 こげん。おそうなったとに？

信夫 うん……。

間。……ト、直子、信夫の顔を見て、驚きもせず、

直子 ……どうしたと？

信夫 え？

直子 そんな顔……

信夫 うん。……なぐられた……。

直子 誰に……。

信夫 知らん……。……生徒やろ……。……暗かったけん、みえん

やった。五、六人おったごたごたばってん……。

直子 ……。何でそげんことばすると？

信夫 知らん。

間。

直子 ……いたそう……。

ト。再び、直子、水を飲む。

信夫 ……。(ト、直子を見ている)

直子 何？……。顔に何かついとると？

信夫 ……うまそうに飲むなあて思うて。

直子 おいしかもん。……あなたも飲みますか。

信夫 よか。……おいが飲んでも、おいしかわけじゃなかとよ。

別に水自体がうまかとじゃなかとやけん。

直子 ええ？

信夫 だけん……水には味のなかやろ。……ばってん、のどのかわいとるもんには、おいしゅう感じる。かわいとらんもんにはただの水。ね、そうやろ……。

直子 ……何か……先生みたい。

信夫 あ、……そう……。

直子 はい、先生。(ト、手をあげ)私、ここに来るまで、島では水道から潮水の出るとばかり思うとりました。

信夫 バカタレ。

直子 蛇口ひねって、わぁー、水の出るって言うたら、義姉さんから笑われてしもうたんです。

信夫 あたりまえたい。

直子 ……その義姉さんは、どこに行つとるとですか？

信夫 大浦に手伝いにでも行つたとかな。

直子は、コップを見つめ……。

直子 ……私も水やろか……。先生……。

信夫 ……ええ？

直子 のどのかわいたとつたときには、……おいしかったとでしよう。

直子、残りの水を飲み干す。そして、信夫を見て、ふふっと笑う。

直子 ……おやすみなさい。

ト、ぼんやり、二階へ去ってゆく。
残された、水差しとコップを見つめている信夫。やがて、水を注いでみる。

そして、飲む。……味わう。

うまくも、まずくもない、ただの水である。

信夫は、救急箱などをしまう。そして、水差しとコップを持って台所へ去り、夕飯の用意を始める。ト、暗がりから、庭に、懐中電灯を持った杉本が現れる。かたわらに女を連れて

いる。女の名前は、江頭えがしら峯子。

杉本　こんばんは、平岡さん、……おりますか。

信夫　（現れて）はい。

杉本　あ、おらした。……さつきから、電話しよったとに、

……佐和子さんおりますか？

信夫　いえ。

杉本　やっぱり。……おらっさんごたるですね。（女に）

信夫　どうかしたとですか。

杉本　それがですね、このお嬢さんが、駐在所に来て……え

っと、お名前は……江頭さんでしたよね……。

江頭　はい。

杉本　で、下の海に行つたらしたとばってん。そこで、佐和子

さんと、一緒になつたらしかとです。経ヶ崎で……。ですよね。

江頭　……。ト、信夫を見ている）

信夫　……。

杉本　ま、まだ、確かなことはわからんとですけどね……。

（ト、江頭を見る）

江頭 ……海を見てたんです。そのの……。知り合いがその海で溺れちゃって……。五年前……。

杉本 あそこは、多かたでしょう……。毎年、だいか、亡くなるそうじゃなかですか……。

信夫 ……ええ……。

江頭 手紙のやりとりだけだったんですけどね、その人とは。

でも、小学生の頃からでしたから……。

信夫 ……そうですか……。

江頭 ……彼が見て育った海を、私も一度見たくなって……。

五年かかりましたけど……。ここに来れるようになるまで……。それは、まあ……。別にいいんです。私、何だか、それで夜になってもずっといて、海を見てたら、女の人が来て……。言うんです……。いつもなら、あの灯台までは、歩いてゆけるのって……。こんな、月夜の晩でなければ……。気がついてたら、本当に、月が真上にあって……。ああ、そうか、だからこんなに明るいのかと思ったりして……。で、その人はつづけて……。月夜の晩になると、潮が満ち、岬は切れ、島になるの……。だから、今は渡れない。こんなに月が真昼のように輝いているから、渡るのはやめた方がいいって言うんです。よっぽど私が、思いつめた顔をしてたか何かで、そんなことを言ってくれたんだと思うんですか……。別に……。私、そういうあれではなかったんですけどね。……。それから、しばらくそこにいて、……。ちよつとおしゃべりして、私は宿にかえろうと思って別れたんです。……。でも、何だか……。気になつて、もどつてみたら、いなかっただんです。……。その人……。

間。

杉本 ……あそこは、あの石段の道しか、なかけんね……もどるとき、誰にもあわんやったとでしょう。

江頭 ええ。

信夫 ……ばってん、……その人が、うちの姉とはかぎらんとですよね。

杉本 ええ、まあ、それは、そうなんですけどね。

江頭 (ほんやりと) その人……子供が死んだとか言ってきました。

信夫 え？

江頭 ……子供さん、亡くなられたんですか？

信夫 いえ。

江頭 ……そうですか……。

間。

杉本 ……それで……その人、もしかしたら、佐和子さんじゃなかかて思うてですね。

信夫 何ですか。

杉本 写真あります？ 佐和子さんの。

信夫 え？ はあ……。子供が死んだって……流産したとです。

……私の家内がですよ。(ト、隣部屋へ)

杉本 そうですけど、そういう家は最近、ここしかなかったけんですね。

信夫の声 だけんで、それはおかしかですよ。(ト、捜している)

江頭 ……男の子だって……言っていましたけど。

信夫（現れて）それじゃ、違いますよ。男の子も何も、うち

は、……とにかく、違います。（ト、アルバムを持っている）

ああ……姉は大浦に行つとるとですよ。妹の嫁ぎ先です。そこ
の親父さんがあぶのうあらすけん、手伝いに行つとるとじゃ

なかやろか。あ、そうですね、今日、明日の命けんていうて……。

杉本 今、大浦さんにも寄つて来たとですよ。

信夫 ……おりませんでした？

杉本 ええ、おらっさんやつたです。

信夫 そうですか……

杉本 すいません。見せてもろうてよかですか。

信夫 ええ。（ト、わたす）

杉本、受けとり、アルバムを開いてゆく。

杉本（めくりつつ）……何か……信夫さんの写真ばかりじ

ゃなかですか……。

信夫 ……。

杉本 ……あ、これ……この人……。 （ト、江頭に）

江頭（見て）……そうです。まちがいありません……。

杉本 とにかく、消防団とも連帯して、あの辺一帯、捜してみ
ますけん。

信夫 ……はあ。

杉本 じゃ、私、先に行つときますけん。

信夫 ……じゃ……私もあとから……。

杉本 お願いします。（ト、去る）

残された女は、信夫を見つめ、

江頭 ……やっぱり、どっか似てますね。……お姉さんと。
信夫 ……。そうでしょうか……。

女、去る。

闇は庭をおかすことなく、
月光は庭に満ちている。

信夫、何となくぼんやりしてしまった。
台所から、湯の沸く音がする。信夫、はっとして、台所へ行こうとする。

ト、台所の方から、ぼんやりと直子が、寝間着姿で現れる。
水差しとコップを持っている。

信夫、驚いてしまう。……湯の音は消えている。

直子、かまわず、ちゃぶ台に来てすわる。そして、コップに水を注ぎ、ゴクゴクゴクと飲み干す。

直子 (ふうと息を吐き、コップを置き立っている信夫を見て)
………どうかしたと? ……。

信夫 え? ……うん……姉さんが、……。

ト、直子がまた、水を注ぐので、

信夫 お前……。何べん、水ば飲んだら気のすむとか。

直子 ……え? ………どうということ? ……。

ト、直子、ゴクゴク飲む。

信夫 ……。(ト、直子をじっと見ている)
直子 何……。顔に何かついとると？
信夫 ……。
直子 あなたも、飲みます？
信夫 いや、よか。
直子 どうして……。
信夫 いや、……。別に……。
直子 どうして……。 どうして、飲みとうなかと？
信夫 姉さんが。
直子 義姉さんは関係なかでしょう。
信夫 いや、……。そうじゃなくて、
直子 私です、ここにいるのは。
信夫 わかつとるよ。
直子 流産したのも、
信夫 うん。
直子 妊娠したのも……。
信夫 あたりまえたい……。 何ば言いよつとか。
直子 じゃ、何で、義姉さんの方が、私より苦しみよると？
信夫 ええ？
直子 いま、……。溺れよるとよ、海で……。
信夫 ……。
直子 私……。うらやましかと……。
信夫 ……何で……。
直子 ……私も、溺れてみたかと。もがいて、苦しんで。 ……
ばってん、助けに来てくれるとやる。 ……私の手ばひいて、
向こう岸まで、一緒に泳いでいってくれるとやる。ね、信夫
さん……。そうやる……。 あのとときのごと、私ば連れていつて

くれるとやろ。

間。

信夫 ……あのとき？

直子 ほら……。二人して、ガタガタふるえて、唇に青うなつておかしゆうなつて、笑うたじゃなかね。

信夫 ……何のことや……。

直子 ……経ヶ崎で……。満ち潮になって二人ともかえりきらんごととなつて。

信夫 ……。

直子 ね、そうやろ。

信夫 ……かえりきらんごととなつたとは、……。姉さんだけいたい……。

直子 何でね。二人一緒やったやろ。

信夫 ……何でねつて……。……。それで、おいが家に父さんば呼びに行つて、

直子 違うやろ。

信夫 いや、助けに行つたとは父さんたい。

直子 何で、違うやろ。

信夫 ええ？ ……何ば言いよつと……。何の話や、これは。

直子 だけん、あんときの……。

信夫 あんときつて……、

直子 私ば、助けに来たやろ。

信夫 ……誰が……。

直子 誰がつて……。あなたが……。

信夫 いつ……。

直子 あんとき……。経ヶ崎で……。

信夫 だけん、それはおいじゃなかよ。……姉さんば助けに行
ったとは父さんたい……。それで……。父さん、流されてしも
うて、

直子 違うやろ！ 違うやろ！ 違うやろ！

信夫 ……。何でね……。

直子 ……そうじゃなかやろ……。私ば助けたとは……。(ト、
声にならない)

間。

信夫 ……。誰や、お前。

直子 ……。

信夫 ……。

直子、残りの水を飲み干し、

直子 ……おやすみなさい。(ト、立ちあがり)

ぼんやりと、二階へ去ってゆく。

信夫、残された水差しと、空のコップを見つめる。
間。……ト、電話が鳴る。

信夫 (受話器を取り) もしもし……。ああ、幸一君……。う
ん……。うん……。ああ……。そうね、今やったと……。
ええと……。こげんとき、どういうたらよかとか、……。ご
愁傷……。ご冥福……。ええ？ ……あ、そう……。とにか
く、気ばおとさんごとして。……。うん……。うん……。わざわ
ざ、どうもありがとう……。……(ト、切る)

月光はますます、冴えて、まぶしいぐらい……。

信夫は、しばらくたたずんでいたが、やがて、庭に出て、闇
の中へ走り去る。

暗転。

5

さらに二日後の昼間。

ガラス戸が閉められ、居間には誰もいない。外は晴天。午後
の陽射しが、庭にある。

玄関の方から、女の声がある。声の主は、清川裕子。

裕子の声　ごめんください……。

返事はない。

裕子の声　……。ごめんください……。

返事なく。しばらくして、若い女が玄関の方から、ふらっと

現れる。清川の娘、有里である。有里はガムをかみながら、

ガラス戸をダンダンとたたく。戸に手をかけると、片方が開く。それから、腰かける。……タメイキひとつついて、空を見上げる。

裕子の声 ……有里。……有里。

裕子、庭に現れる。ポストンバッグを持っている。

裕子 ……もう、返事しなさいよ。

ガムをかむ有里。あたりが気になる裕子。

裕子 ちよつと、勝手にあがつちやダメじゃない。

有里 開いてたんだよ。

裕子 開いてたって、……人の家なんだからよしなさいよ。

有里 ……ま、すわんなよ、つかれてんだから……。

二人並んで、きゅうくつそうにすわる。

有里 はらへったよ。

裕子 ええ？ ……そうか、朝、食べたっきりだもんねえ……。

有里 へつてないの。

裕子 うん……。何だか、フェリーに酔っちゃって……。あんな何ともなかった？

有里 うん。

裕子 血だね、父さんの。

有里 やめろよ、気持ち悪い。

裕子 仕方ないよ、こればかりは……。親は、選べないんだから。

有里 ……。

裕子 (もう一方のガラス戸を押しつつ) こっち、開かないの……。(ト、あきらめる)

有里 はらへった……。

裕子 うん……。朝、何食べたっけ……。

有里 ……パンだよ、……駅前で……。

裕子 あ、そうか……。……ちよつと待ちなさいよ、何とかするから……。

有里 何ともならないよ。

裕子 だって、そんなことわからないじゃないか……。

有里 ……。何ともならないって……。

裕子 ……。

有里 ……何か……。空が高いね。

裕子 ……。秋だからね。

有里 秋かあ……。

間。

裕子 ……。

有里 ……。はらへった……。

ト、信夫と直子が現れる。二人とも喪服を着ている。
裕子、立つ。

裕子 あ、……あの、すみません……。勝手にお邪魔して。ホ

ラちよつと、立ちなさい……。 (ト。有里に)

信夫 はあ……。あの……。

裕子 ……あ、私……清川の家内です……。

信夫 ああ……。

裕子 ……はじめまして……裕子といいます。

信夫 平岡です。

裕子 これは娘です……。ホラあいさつして……。立って……。

有里 ……こんちは……。 (ト、そのまま)

信夫 こんにちは……。

直子 こんにちは……。

裕子 奥さんですか？

直子 ええ……。

裕子 あの、ホント、すみません、勝手に入りこんでしまつて。

直子 いいえ、あの、こんなところじゃ、何ですけん……どう

ぞ奥に……。 (ト、勝手口の方へ去る)

裕子 あ、いえ、もう……。

信夫 どうぞ、こっちに……。こっちから、あがらんですか。

(ト玄関へ)

裕子 はい……。いえ、もう、ホント、ここで……。

信夫の声 ばってん、立ち話も何ですけん……。

裕子 ……はあ。(ト、信夫を追う)

直子、もう一方のガラス戸を開ける。

信夫が玄関の方から、廊下に現れ、

信夫 どうぞ……。

裕子 はい……。 (現れる) 失礼します。

直子 どうぞ……。

直子、裕子を居間に通して、自分は台所へ。

信夫、ちゃぶ台に来て、裕子はやや離れてすわる。

信夫 ……東京からですか……。

裕子 ……ええ……。

信夫 そうですか……。 ……遠いところ……。

裕子 いえ……。

間。 ……ト、縁側の有里、タバコを吸う。

裕子 あんた、そんなところで吸うのやめなさいよ。

有里 ……。(ト、吸う)

裕子 ……やめなさいって……。

有里 ……。(ト、吸う)

裕子 ……すいません……。ホントに……。

信夫 いえ。……おーい、灰皿。(ト、台所)

「台所から、「はい」と返事。

灰皿を持って、直子が現れ、有里の前に「どうぞ」と置く。

そして、また台所へ。

有里はそれを視界に入れず、庭に灰を落としている。

信夫 ……近所の身内に不幸のあつてですね。……それで、留守しとつたのです。

裕子 あ、そうですか……。すいません、こんなときに……。

何だか、押しかけちゃって……。

信夫 いえ……。

裕子 ……大島は初めてなんです。清川から、何度か話は聞いたことはあつたんですけど……。

信夫 そうですか……。

裕子 ええ……。ヨカトコゾって、いつも言ってたんですよ。

信夫 ……ああ……。

裕子 ……本当に、ヨカトコですね。……。

信夫 はあ……そうですかねえ……。

直子、盆に茶菓子などを持って現れ、有里の前で、

直子 ここでよかですか……。

有里 ……はい……。

直子、縁側に置き、ちゃぶ台に来て、

直子 どうぞ。(ト、裕子の前へ)
裕子 すいません……。

直子、信夫の前にも置いてすわる。
静かな時が流れる。有里はあいかわらず、タバコを吸う。

裕子 あ……あの……、それで……、その……。
信夫 ……姉ですか……。
裕子 ……はい。
信夫 ……それが、今、おらんとですよ……。
裕子 ……そうですか……。

間。

裕子 どこか、お出かけなんですか？
信夫 ……ええ……まあ……。
裕子 ……そうですか……。

間。

裕子 ……どこに……。
信夫 ……。ちよつと……。それが……わからんとです。
裕子 ……わからん……。というのは、……どうい……。
信夫 ……。はあ……。

間。

裕子 主人……、清川もどこにいるのかわからないんです。
……私たち……。住むところありませんでしょう。ですからこれからどうしようかと……。その、清川の家にも行っ
たんですが、もう壊れちゃってて、とても住めるような、あ
れじゃないものですから……。どうしたものかと……。

信夫 ……。

裕子 とりあえず、清川本人に会うしかないと思ひまして、捜
してるんですが、全く手がかりもなくて……。

信夫 ……そうですか……。

裕子 何でもいいんです。……何か思いあたることはありません
か……。

信夫 はあ……。

裕子 一緒ということはありませんか。

信夫 は？

裕子 お姉さんと……。うちの……。主人が……。(ト、声が
ふるえる)

信夫 そげんことはなかって思いますが……。

裕子 それじゃ、お姉さんはどこに行っただんですか？

信夫 さあ……。

裕子 おかしいじゃありませんか……。そんなの……。行き先
がわからないなんて……。

間。ト、有里、お菓子をパクリと食べ、お茶でずずつと流し
込み、タバコをポンと庭にほうり、立ってふり向いて、

有里 もう、いいよ、母さん……。行こ……。

裕子 ……。

有里 やっぱ、みつともないよ、こんなの……。

裕子 ……。

有里 行こうよ。……ま、何とかなるよ……。

裕子 ……何ともなりやしないじゃないか……。

有里 ……働くよ……、何だってやるよ……、あたし……。

裕子 ……そんなことどうだっていいの。……

有里 ホラ、行こうよ。……ちよつと、すみません……。 (ト、あがつて来て)

裕子の腕をつかみ、庭へひきずり出す有里。

裕子 いたい、いたい……。……いたいじゃないか！

有里 (おじぎして) お邪魔しました。

ト、有里、荷物を持って、裕子を連れ出してゆく。裕子の「ちよつと、いたいから離しなよ。……あざになるだろ。離しなつて。だって、おかしいじゃないか、いないなんて、そうだろ、何もかもこの女のせいなんだから。絶対、一緒なんだって……」という声が遠ざかってゆく。

刷毛^{はけ}で描いたような雲、空高く。

残された二人。……しばらくして、

直子 ねえ。

信夫 うん？

直子 ……おなかへりませんか？

信夫 うん……。ばってん、まだ夕飯には早かたい……。
直子 そうですか……。

間。……二人、外を見ている。

直子 ……萩はぎの花の咲きましたね。

信夫 ……、うん……。

間。……二人、外を見ている。

直子 ……さ、……御飯の用意でもしますけん。

信夫 あ、そうや……。

直子 (立つ) あ、……その前に着がえんばですね。

信夫 うん……。

直子、隣の部屋に行こうと、

信夫 ……ええ？

直子 はい？

信夫 ……何で、そっちに行くの？

直子 ああ。……これ、お義姉さんのとば借りたんです……。

(ト、隣部屋に去る)

信夫 フーン。

信夫は、また秋の空をながめ、それから、茶を飲み干し、隣
部屋の暗がりへ消える。

かすかに、波の音……。